

稲作り 篠栗町立北勢門幼稚園（福岡県糟屋郡）

・麦刈りの様子を見学に行く（6/3）

近くの田んぼに麦刈りの様子を見に行った。機械の中に吸い込まれるように入っていく麦を熱心に見ていた。その後、田植えの準備や田植えが始まった。その様子を登降園時、継続的に興味深く見ていた。「自分達も田植えがしたい、やってみたい」という子ども達の声が高まり、保育者が「幼稚園にみんなで力を合わせて田んぼを作ろうよ」と言うと「ヤッター ヨッシャー」と子ども達がガッツポーズを取り、歓声をあげた。

・小さな田んぼを作り・田植えをする（6/23）

さっそく幼稚園に水田を作り、田植えをしようということになったが「先生どやって幼稚園に田んぼ作ると？」「外の田んぼの土もってくると？」と子ども達も考え込んでいた。そこでトロ船を準備し「ここに作ってみようか？」と保育者が提案してみた。子ども達は「うんいいね」とみんな賛成したが、「でも先生、田んぼの土はどうすると？」と、また考えこんでしまった。そのとき、雨が降り、ドロドロになっていた畑の土のことを思い出した M 男が「あっ、あの畑の土を持ってきて水を入れればいっちゃない？」と案を出してきた。すると「うんそうやん畑の土もってこよう」とみんなも土を運び出した。汗びっしょりになりながら、「わっせい わっせいスクラムだ！ 田んぼ 田んぼ」と掛け声をかけながら、クラスみんなで畑の土を運び入れた。トロ船にいっぱい土が入ると、さっそく水をいれ、手でこね始めた。「何かお団子作りみたい！」「段々柔らかくなってくるね」「なんかヌルヌルなってきたよ」「わーギューと握ったらドロドロ土が出てきたよ」と手で土の感触を味わっていた。手に泥をつけ「手袋してるみたい」「わー面白いね」と言い合い友達と楽しんでいた。

さらに 中に入り込んで全身泥こになりながらみんなで何度もこね、ようやく小さな田んぼが完成した。「やったー 僕たちの田んぼだ！」「本当の田んぼやん！」「僕たちが作ったんだよね」と誇らしげにしていた。そして さっそく念願の田植えを行った。苗を4～5本採り、人差し指と中指と親指3本でしっかりつかみ、苗がまっすぐなるように一人ずつ交替で丁寧に植えていった。畑の土に水を加え、よく捏ねていくと本物の田んぼが出来たという喜び。また砂でなく、畑の土と水を混ぜ合わせて出来た田んぼの不思議さを実感出来た。日頃味わえないドロドロ土の感触を感じ、「ヌルヌルしたけど気持ち良かったよ」「苗をブニューとして植えたのが楽しかったよ」とロク々に言っていた。さらに この苗は餅になる米である事を話すと「早く大きくなってこのもち米で餅つきがしたいな」とさっそく生長に期待していた。



・小学生が田植えしている様子を見学に行く（6/28）

近くの田んぼに小学生のお兄さんやお姉さん達が田植えしている様子を見に行った。みんな一列に並び、ドロドロの田んぼに苗を植えてある様子を子ども達は興味深く見ていた。ドロドロの手と足を見て「茶色の手袋と靴下を履いているみたい。」と話していた。実際に自分達も田植えを小さな田んぼで経験しているのでよりいっそう興味関心が出たようだ。近くにいたおたまじゃくしやかぶとえびを捕まえ、幼稚園に持ち帰り、自分達の小さな田んぼに入れ、飼うことにした。

・稲の生長の様子をみる（9/1）

夏休み明け、稲の様子を見て「おー背が伸びたね」「うん段々伸びてきたね」「苗が太くなってきてる」「うん大きなカブになってるね」「あれ？ 苗の数が増えてるよ」「たしか5本ずつ植えたのになー」「ねえねえ 12本に増えてるよ。なんでやろ？」「面白いね」「もっと増えるのかな」と分蘖した苗を見て思い思いに話していた。ところが、横に置いていたかたまりの密集した苗を見て「あれ？ こっちの苗は全然大きくなってないよ」「うん色も黄緑だよ」と育った苗と比較して言っていた。「でも何で大きくなれなかったんやろかねー？」と保育者がつぶやいているとそれを聞いた D 男が「たぶん狭くて窮屈だったんだよ」と、さらに横にいた M 男も「きっと根っこが大きくなれなかったんだよ」と言っていた。周りの子ども達も「見てみたいね。見てみようか」と言い、一本だけ抜いてみた。すると密集した苗の方は植えた時とほぼ同じでほとんど大きくなっていなかったことに気が付いた。「やっぱり、ばらばらにして植えんと大きくなれんちゃねー」と納得していた。さらに、小さな田んぼを覗いて見てみると「あれ？ かぶとえびがいなくなっている！ 田んぼが濁ってないよ」「うん本当だ！ かぶとえびがいる時は田んぼが濁ったもんね」「でもあのかぶとえびはどこに行ったっちゃろ？」「どこか逃げたちゃない？」「逃げられんと思うちゃんね」「土の中に隠れとるちゃない」と土の中を見ていた。「でもやっぱりおらんね」「卵を産んで死んだんかもね」「じゃーこの土ずーっとおいて置こうよ」ということになり、見守ることにした。

・稲穂が出て花が咲く(9/20)

9月半ば頃、小さな田んぼの稲の変化に気がついた。他の稲に比べると遅い穂あったが、我が小さな田んぼにも出始めた。朝、当番の子がいろんな野菜の「おはよう早く大きくなってね」と言いながら声を掛け、水掛けをしていると、「あっ何かお米みたいな粒が出てきたよ」と稲の変化に気付き、周りの子達に知らせにきた。

5~6名集まりその稲穂を触っていた。「でも中は何もないみたい。ぺっちゃんこだ」と不思議そうにしていた。それから2~3日してから花が咲き、初めてみる稲の花に「へーこれが稲の花なんだ。すごいね」とみんな驚いて見入っていた。「またここにも花が咲いたよ。」「ここも」「ここも」と稲の花を探して楽しんでた。少しずつ膨らみ、重みで稲穂が下に垂れていく様子を子ども達と一緒に見ていった。時々バッタが稲の葉を食べにきていた。葉っぱに所々穴ができていたので、「バッタくん少しぐらいは食べていいけど、全部食べんでね。」と言っていた。

・小さな田んぼの稲刈りをする(11/8)

10月中旬に近くの田んぼに稲刈りや小学校の田んぼの様子を見に行き、収穫がより楽しみになりました。稲穂も緑色から段々と黄色みがかかってきて「もうそろそろ稲刈りしていいんじゃないのかな?」と期待も膨らんできていた。さっそく一人ずつ実際に稲刈り用の鎌を使って経験した。「わー切れた」「ぐっと力が入ったね」「うーん重たいね」「ほんとにお米になったね」と自分たちで育てた稲を、収穫出来る喜びを感じていた。



・脱穀をする(11/18)

稲刈りした後、手で一粒一粒でいねいに、もみ取りをした。「大事な餅米やけん一粒も落とさないようにせんといかんね」とみんなていねいに集めていた。一本の穂から何粒の米が出来たのだろうかという疑問が出たので、それぞれグループに分かれ、数えてみた。グループの友だちと数えやすいようにと、自分たちで枡を描き、行っていた。一本から、50~70粒の米で、一株は1000~2000粒の米が出来ていた。「すげーいっぱいお米が出来とる!」「一個のお米の種がたくさんのお米の赤ちゃんを産んだんだね。」と子ども達も驚き、感動していた。「このもち米を使ってお餅つきが出来るといいな」とさらに、期待も膨らんでいた。一粒ずつ殻を外し、玄米にし始めた子ども達、しばらくしていると「あーこれは大変だ。なかなか出来んね。なんかいい方法はないかな」と考え込んでいた。そんなとき主任の先生より、ビンの中にもみを入れ、棒でつつき玄米にする方法を教えてもらった。「へー面白いね」「昔の人はこうやってお米にしたんだってよ」「お米にするって本当に大変なんだね」と米になるまでの苦労を実感していた。玄米になった米を近くの農家の方をお願いして、精米してもらい、ようやく白いもち米となった。そして12月には、このもち米を使って、餅つきをした。

その後の取り組み

3月、僕たちが大事にしてきたいろんな種を年少さんに渡そうよ」と、3月まで大事に保管していた野菜や花の種とともに、稲の種を年少さんに託した。

(そして17年度)5月末には籾米がどういふものか見たりを触ったりした。その後、発芽しやすいように水に浸しておいた籾米から芽が出ているのに気付くと、去年の年長組が田んぼを作ったことを思い出した。

6月末、田んぼや畑、いろいろな土のことなど見たり考えたり、実際に触れて感触を楽しんだりしながら、田んぼ作りをした。小学校の田植えを見に行き、もってきた田んぼの土の中に足を入れ、「ヌルヌルの泥だね。」「きやー気持ちいいねー」と、土の感触を味わった。土の量を考え合いながら足し、田んぼが出来上がった。

一人一人丁寧に田植えをした。本物みたいにできた田んぼに、見てきた田んぼにオタマジャクシがいたことを思い出して、飼っていたおたまじゃくしを放した。身近に繰り返し見たり触れたりすることができる環境になった。

みどころ

長期間にわたる稲作の活動を進めるために、この事例では、地域の環境や小学生の活動を効果的に取り入れています。稲作への興味、モデルとなる姿、そして、稲の環境や生長を比較する対象があることで、稲作の具体的な作業や稲の生長を実感し、幼児なりに自分の思いや予想、期待感をもって活動することができたと思われます。また、幼児らしく興味の対象が広がり、近くにいたおたまじゃくしやカブトエビを捕まえて幼稚園に持ち帰り、自分達の小さな田んぼに入れ、飼うことにしたり、かぶとえびがいなくなったことを「卵を産んで死んだんかも?」と考え、「土をずっととって置こう」と話し、見守ることにしたり、葉っぱに所々穴ができていたので、「バッタくん少しぐらいは食べていいけど、全部食べんでね。」と言ったりするなど、周辺の身近な自然にも関わる姿があります。お米の栽培や生長とともに、春から秋へと季節が大きく変わっていく自然の変化の様子も、感動体験とともに心に残っているのではないのでしょうか。